

〈研究ノート〉

共同研究 〈諸文化圏・諸言語圏における女神〉

ヒンドゥー教の祭礼における 女神たちの役割とお姿

— ディーワーリー（燈火）祭,
ホーリー（迎春）など五つの祭礼の考察 —

坂 田 貞 二

Abstract

Among many festivals celebrated by the Hindus in North India, this paper describes only five of them mainly dedicated to the Goddesses in this manner: the days and the ways they are celebrated, the stories on their origin and the songs sung on the day. The five are as follows:

- **Gangaur**, in which the wives pray to Gan and his wife Gaur for the long lives of their husbands.
- **Śītalāṣṭomī**, in which the ladies pray to the goddess of smallpox Śītalā not to attack their family members.
- **Vaṭ Sāvitrī**, in which the wives pray to the Goddess and pious wife Sāvitrī for the healthy life of their husbands.
- **Diwālī**, in which men and women invite the Goddess of wealth *Lakṣmī* to their homes.
- **Holī**, in which men and women invite *Holikā*, the Goddess of spring/new year.

On the occasions of these festivals goddesses living in the heaven come down to the earth and meet human beings. Thus, Hindu Festivals dedicated to the Goddesses provide excellent occasions for human beings to come closer to the heavenly Goddesses.

キーワード：ヒンドゥー教，北インド，女神祭礼，天界と人界，神と人の交流

〔0〕 本稿の目的、考察の範囲、資料

本稿は、共同研究〈諸文化圏・諸言語圏における女神〉の一環として、ヒンドゥー教徒が行う多数の祭礼のうち、北インドで祝われ、女神崇拝を中心とする五つの祭礼について考察するものである。

祭礼が行われる日は、ヒンドゥー暦の白半月（新月から満月に向かう）の幾日、黒半月（満月から新月に向かう）の幾日というように数えられる。ヒンドゥー暦については、本稿〔I〕のバーラハ（十二の）マーサー（月）に示してある。祭礼の月と日は、つぎの①に例示した二例でわかる。

ヒンドゥー教徒の祭礼は、祀られる神々の性別で分けるとつぎの三つになる。

- ① ラーマ王子の生誕を祝う**ラーム・ナワミー祭**（ラーマ〔生誕の〕チェート月 白半月〕九日）、牧童クリシュナの生誕を祝う**ジャナム・アシュトミー祭**（クリシュナ生誕の〔バードー月 黒半月〕八日）のように、男神崇拝を中心に置くもの。
- ② シヴァ神とパールヴァティー女神の結婚を祝う**シヴラートリ祭**（シヴァ神の夜）のように、男神と女神の両方を崇めるもの。
- ③ **ガンガウル祭**のように、女神を中心に置いて、妻が夫の長寿を願ってシヴァ神の妃ガウルに祈るもの。

本稿では、北インドのヒンドゥー教徒が女神を中心に置いて祝う、つぎの五つの祭礼について考察する。

- A. 妻が夫の長寿をシヴァ神ガンとその妃ガウルに祈る、**ガンガウル祭**。
- B. 家族が疱瘡ほかの悪疫にかからないよう女性が、疱瘡の女神**シータラー**に祈る**祭り**。
- C. 妻が夫の長寿を女神と貞女サーヴィトリーに祈る、**ヴァット・サー**

ヴィトリー祭。

D. 燈火で道を示して富の女神ラクシュミーをみなで家に招く、**ディー
ワリー祭（燈火祭）。**

E. 旧年の穢れをホーリカー女神に燃やしてもらい、人々が色水・色粉
をかけあって春・新年を迎える、**ホーリー祭。**

本稿はこれらの祭礼の個々について、それが**行われる日**、その**あらまし**、
その**祝い**かた、その**由来譚**と**祝い歌**を示したうえで、**女神が果たす役割と
その姿**を記す。

これらの叙述の基本的な資料としては、筆者が日ごろ親しんでいる祭礼
解説書を用いる。それらの多くはヒンディー語で書かれているが、英語に
よる Kane の文献によることもある。それらを補うために、英語で書かれ
たインド古典の研究書や現代インド社会の調査報告書をも参照する。

2015 年の中間国勢調査によると、インドの人口は 12 億 8 千万人を超え
ていて、そのうち共通ヒンディー語とその諸方言を話す人は 4 億人くらい
である。それらが話されている地域は、北インドのガンガー川とヤムナー
川の中流域、およびそれらを囲む丘陵・砂漠である。ヒンディー語はまた、
インド憲法によって「インド共和国の公用語」と定められている。

インドは多数の宗教を奉ずる人々が暮らす連邦で、そこにはヒンドゥー
教徒のほかに、回教徒、キリスト教徒、スィク教徒、仏教徒、拝火教徒な
どもいる。ヒンドゥー教徒はそのうち 80 パーセントほどで、10 億人を超
えていた。

つぎの書は題名のとおりヒンドゥー教徒の祭礼に限らず、全インドの人々
の祭礼を取りあげているので、インドの祭礼の全貌を知るうえで有益であ
る。

Usha Sharma, *Festivals in Indian Society* Vol. I & Vol. II,
New Delhi: Mittal Publication, 2008.

〔Ⅰ〕 北インドの一年の季節と祭礼：サーヴァン月ではじまる 一年十二か月の歌バーラハ・マーサーの邦訳で知る

アーシャー・バハンとラードー・バハンの姉妹が著した『インドの斎戒と祭礼 および女性による歌』には、115 を超えるヒンドゥー教徒の祭礼が説明されている。その書には、春にラーマ王子の生誕を祝って行われる**ラーム・ナワミー祭**、夏に牧童クリシュナの生誕を祝って催される**ジャナム・アシュトミー祭**など、男性の神々を中心とする祭礼が多く取りあげられている。しかしその書は、春にシヴァ神ガンとその妃ガウルを祀る**ガンガウル祭**や秋に富の女神ラクシュミーを招く**ディーワリー祭**など、女神を中心に置く祭礼をも少なからず取りあげている。

ところで、北インドの一年の季節の移りかわりと月ごとの祭礼のあらましを知るうえで有益な詩のジャンルに、バーラハ・マーサーがある。バーラハ（十二の）マーサー（月）は、14 世紀ころから今日までのヒンディー語地域で親しまれている。その歴史的な展開については、近刊の [Sakata 2018] に述べておいた。

バーラハ・マーサーがどの月からはじまるかを見ると、春のチェート月（グレゴリオ暦を基とする太陽暦で3～4月）にはじまるものが多いが、雨期のサーヴァン月（7～8月）にはじまるもの、初秋のアサウジュ月（9～10月）にはじまるもの、晩秋のカーティク月（10～11月）にはじまるものなどもあり、はじまりの月はさまざまである。

下に掲げるのは、アーシャーとラードー姉妹が著した『インドの斎戒と祭礼 および女性による歌』（pp. 281～283）に収められたのを訳したもので、雨期のサーヴァン月（7～8月）にはじまる。雨期に家を発って旅に出たクリシュナを、恋する女性が帰宅を待ちわびる心細い思いを、親しい女性の「お友だち」に呼びかける形式をとっている。

邦訳では、月の名と祭礼を太字で示す。[] 内は訳者による補足説明。

サーヴァン月にはじまるバーラハ・マーサー

シトシト シトシト雨が降っています お友だち、池の水かさが上ってきました。

はじめは**サーヴァン**月です、[夫の長寿をパールヴァティー女神に祈る]**ティージュ**祭です。

クリシュナさまが家におられたら、あたしもクリシュナさまとブランコをします。

シトシト シトシト雨が降っています お友だち、池の水かさが上ってきました。

二番目の月は**バードー**月です お友だち、夜にはあたりが真っ暗になります。

クリシュナさまが家におられたら、あたしもいっしょに燈火を点します。
(各月の終末で「シトシト」とはじまる行は、第一の月サーヴァンと同じものが繰り返されるので、11 番目のジェート月まで省略する。)

三番目は**アソージュ**月です お友だち、希望の月になりました。

クリシュナさまが家におられたら、[ラーマの勝利の祭り] **ダシャヘラー**をともに祝います。

四番目は**カーティク**月です お友だち、[燈火で富の女神を招く] **ディーワリー**を祝います。

クリシュナさまが家におられたら、ディーワリーをともに祝います。

五番目は**アガハン**月です お友だち、この月には夫の幸せを祈ります。

クリシュナさまが家におられたら、あたしもお化粧してその方の幸せを願います。

六番目は**ポーフ**月です お友だち、寢床を立派に飾ります。

クリシュナさまが家におられたら、あたしも寢床を飾っていっしょに休みます。

七番目は**マーグ**月です お友だち、寒い冬になりました。

クリシュナさまが家におられたら、寢台に厚い布団をかけていっしょに寝ます。

八番目は**ファーグン**月です お友だち、[旧年の穢れを焼き払う] **ホーリー祭**を祝います。

クリシュナさまが家におられたら、色水・色粉をかけあうでしょう。

九番目は**チェート**月です お友だち、[男児が] **テースー**を祝います。

クリシュナさまが家におられたら、布を染めて祝いの支度をします。

十番目は**ヴァイサーク**月です お友だち、みなが花園を造るときです。

クリシュナさまが家におられたら、わたしも腕輪でお洒落をします。

十一番目は**ジェート**月です お友だち、朝から熱風が吹きあれます。

クリシュナさまが家におられたら、団扇で扇いでさしあげます。

十二番目は**アーシャル**月です お友だち、厚い雲が空を覆います。

クリシュナさまが家におられたら、小屋を建てていっしょに空を見ます。

クリシュナさまはきょうも戻られません、旅で道に迷われたのかと心配です。

薔薇の花を背の君と思い、お会いしたいと待ちのぞみます。

シトシト シトシト雨が降っています お友だち、池の水かさが上ってきました。

上に訳した「サーヴェン月にはじまるバーラハ・マーサー」には、夫の長寿を妻が祈るティージュ祭、ラーマが羅刹ラーヴァナに勝利したことを祝うダシャヘラー祭、燈火で富の女神を招くディーワリー祭、旧年の穢れを焼き払うホーリー祭、男の子たちが歌いながら家々を巡って穀物をもたらうテースー祭の五つだけが取りあげられている。いっぽう本稿で説明・考察する女神を中心とするヒンドゥー教徒の祭礼のうち、ガンガウル祭、シータラー女神祭、ヴァト・サーヴィトリ祭が、この歌では言及されていない。

しかし 115 を超えるヒンドゥー教徒の祭りを取りあげたラードー姉妹によるこの祭礼手引書には、それらも記述されている。一年十二ヶ月の歌は、長さに制約があるなかで詠われたものなので、主要な祭礼みなを含められなかったのであろう。

〔Ⅱ〕 主に女神崇拝をする五つの祭礼

この章では、北インドで主に女神を崇めるヒンドゥー教徒の五つの祭礼をとりあげ、それが**行われる日**、その**あらまし**、その**祝いかた**、その**由来譚**と**祝い歌**を示したうえで、**女神が果たす役割とその姿**を考察する。

フリード夫妻はデリー近くの北インドの村で調査して、『北インドのあ
る村におけるヒンドゥー教徒の祭礼』という報告書を公開し、その村で行
われる祭礼をつぎの四つに分類している [Freed, Stanley A. and Ruth S.

Freed, pp. 26-35]。

- ① 繁栄・豊穡の祈願と災禍からの庇護を願う祭礼（燈火の祭りディーワリー、疱瘡の女神シータラーの祭りなど）。
- ② 神々を敬する祭礼（クリシュナ神が生誕した日を祝うジャナム・アシュトミー祭、ラーマが羅刹に勝利したのを祝うダシャヘラー祭など）。
- ③ 春の到来を祝うホーリー祭。
- ④ 人の触れあいと死者を悼む祭礼（姉妹が兄弟の右手首に力紐を結ぶラーキー祭、亡くなった先祖を供養するシュラーッダなど）。

フリード夫妻の調査報告書には例示されていないが、本稿で取りあげる祭礼に、妻が夫の長寿を祈るガンガウル祭、妻が夫の無事と長寿を願うヴァト・サーヴィトリ祭がある。これらはフリード夫妻による分類では、①の「繁栄・豊穡の祈願と災禍からの庇護を願う祭礼」に該当するであろう。

以下に、北インドのヒンドゥー教徒が女神を中心に置いて祝う祭礼五つを取りあげ、人間の女性がなにを願いつつ女神らを崇め拝するのかに注目する。

A. ガンガウル祭（シヴァ神ガンとその妃ガウルの祭り）＝妻（や娘）が夫（になる人）の健康と長寿を、シヴァ神ガンとその妃ガウル神に祈る祭り

ガンガウル祭は、ヒンドゥー暦で第一の月チェート白半月の三日（太陽暦で3月下旬）に、夫が元気で暮らす妻や結婚適齢期の女子が行う祭礼である。ガンは衆を率いるシヴァ神の別名であり、ガウルは色白なその妃パールヴァティー女神の別名である。

故事によれば、シヴァ神が妃のパールヴァティーに無尽の幸いを与えると約束したことにちなみ、それに感激したパールヴァティー妃が自分にと

えられた幸いを多くの女性に届けたいと願ったことから、この祭礼ははじまったとされる。

この祭礼の日にその場を通りかかれば、祝いの衣装で着飾った女衆が頭のうえに水を入れた壺を載せ、晴れやかに歌を詠っているさまに出逢うであろう。

祭礼の祝いかた

- ① 祭礼の日に夫が健在な妻と結婚適齢期の女子は、砂でガウル女神の像を造る。
- ② 女衆は砂のガウル女神の像に、ガラスの腕輪、髪分け目に塗る朱、櫛などのめでたい物を捧げて化粧させる。
- ③ その日に夫が健在な妻と結婚適齢期の女子は、お昼まで絶食する。
- ④ 女衆はお盆に載せた白檀、米、花などを、ガウル女神像に捧げて拝む。
- ⑤ 女衆はお昼すぎに、それらのお供物のお下がりで昼食を摂る。
- ⑥ 女衆は祭礼の由来譚を年長の女性から聴く（後掲）。
- ⑦ 女衆はガウル女神像から髪分け目の朱をいただいて自らの髪につけ、夫（になる人）の健康と長寿を願う。
- ⑧ 最後に砂のガウル像に、壺に入れて運んできた水を飲んでいただき、像を川か湖に流す。

[Tripāthī pp. 35, 36]

祭礼の由来譚、祭礼の歌

チェート月の白半月三日にガン神とその妃ガウル女神が、ナーラダ仙を伴ってある村に着きました。村の女衆が一行の歓迎のために、白檀、米、花などをお盆に載せて差し込みました。ガウル女神はそれらを悦んで享け、彼女らに夫の長寿を祝福する鬱金^{うこん}を振りかけました。

そのあとで村の良家の女衆が、金や銀でできた立派なお盆にお供物を載

せて差しだしました。それを見た夫のガン神は心配して、「鬱金はさきほど振りかけたから、もうない。どうしよう？」とガウル女神に問いました。ガウル女神は自分の指を切って、そこから出た血を良家の女衆に振りかけて祝福しました。

それから女神は川に行き、沐浴して身を浄めてからシヴァ神ガンの像を砂で造り、拝みました。そのさまを見て感激したシヴァ神は、こう祝福しました、「われを崇め、なれを拝する女衆の夫は不滅の生を享け、生死の悩みのない涅槃の境に達するであろう。」

同行したナーラダ仙はガウル女神に、「あなたさまは秘かに背の君の幸いを祈られました。あなたさまと同じようにする女衆の背の君はみな、長寿を愉しむでしょう」と言いました。

それからというもの、女衆はこの祭礼を行うようになりました。

[Gaṅgrāre (ガングラーレー) によると、この詳細は『スカンダ・プラーナ』カーシー巻の後編 80 章に記述]

妃のガウル女神さまとシヴァ神のガンさま、どうぞ扉を開けてください。廟の外にお供物を載せたお盆を、ガン神さまとガウル神さまのために置きました。

女衆はガンとガウルを拝し、祝福してくださいとお願いします。

あの人は「お米や野菜をください」と、富や宝を願います。

(続く 9 行略)

[Bhansāri p. 31]

ガンガウル祭での女神ガウルの役割と姿

ガウル女神はここで、自分を敬愛してお供物を捧げる女衆のだれにも優しくし、またそういう自分を支えてくれる夫のガン神を秘かに敬っている。女神が夫を敬うという由来譚は、人間の妻の姿でもある。

なお祭礼の祝い歌は、祀られている廟の扉を開け「ガン神とガウル女神

は、わたしたち女衆が用意したお供物をお食べください」と請う点では祭礼の趣旨に添っているが、6行目の「あの人は富や財宝を願います」という部分は、夫の長寿を祈る趣旨から外れている。民謡ではこのように、祭礼の本旨から外れて、詠い手の本心がほとぼしりであることがあるらしい。この祭礼のときに富と財宝を願う類似の歌がブラジュ地方でも詠われていることが、Ācārya p. 78 にも述べられている。

B. シータラー女神祭＝家族が疱瘡ほかの悪疫にかかったり、不幸になったりしないよう女性がシータラー女神に祈る祭り

ヴァイサーク月黒半月八日（4月中旬）に、夫が健在な妻や子をもつ母親が、疱瘡の女神シータラーに祈って宥める祭礼である。気温が40度を超える真夏の5月は、かつての北インドでは疱瘡が流行る時期であったので、その時期を控えたこのころに疱瘡の女神シータラーを宥めるのである。シータラーはデーヴィー（女神）であり、またマーター（母）でもあるが、皮肉なことにシータラーという語は形容詞 śītal（シータル、冷たい）から生じた女性名詞形である。察するにその名は、疱瘡の高熱からシータルな状態にしてくれるようシータラー女神やシータラー母に祈るという、人間の妻や母の気持ちに発しているのだろう。

祭礼の進めかた

- ① この祭礼の日には、竈に火を入れて煮炊きすることを慎む（料理は前日にしておく）。
- ② 当日は沐浴して身を浄めた女性が、シータラー女神の姿を想像する（女神は駱駝に乗り、片手に箒、片手に水壺を持つとされる）。
- ③ シータラー女神に白檀、凝乳、米、花、水などを供える。
- ④ シータラー女神に、夫や子どもが疱瘡にかからないよう祈る（なお疱瘡の患者がいる家では、この祭礼をしてはならない）。

⑤ 祭礼の由来譚を年長の女性から聴く。

[Rśikumār Śarmā pp. 21, 22. Kane V-1 p. 428]

祭礼の由来譚，祭礼の歌

人々の幸いを願い、法の導きに従うインデュムヌ王には、王女と王子が一人ずつ授かりました。王女がカウンディニャ国の王子と結婚し、嫁ぎ先に行く吉兆のときがシータラー女神の祭礼と重なりました。それで王は祭礼をさきに行い、そのあとで王女を出すことにしましたが、それはもう吉兆のときでなくなっていました。

それが心配な王は、一向とともに僧を行かせました。僧は奥方も連れて行きました。

森で一行が止まったときに、僧は疲れはてて菩提樹のしたで眠ってしまいました。その間に王女は女衆とともに、神さまを拝するために神殿に行きました。

戻ってくると僧は、樹にいた毒蛇に噛まれて死んでいました。僧の妻は悲しんで、殉死しようとしてしました。王女はそのさまを見て、シータラー女神を念想して祈りました。それに応えて老婦人の姿をした女神が現われ、「なれが食を絶ち僧の妻の平安を願うなら、僧は生きかえるであろう」と言いました。王女がそうすると、僧は生きかえりました。

ところが王女が夫の王子のところに戻ると、王子も毒蛇に噛まれて死んでいました。そこで王女は嘆いて、「死んで夫のもとに行きます」と言いました。その声を聞いて老婦人が現われ、「シータラー女神を敬してお供物をあげるなら、あなたの苦痛はなくなりましょう」と告げました。王女が女神にお供物をあげ死んだ夫を起こすと、夫は生きかえりました。

[Kane V-1 p. 428 によると、A. K. Sen の『ベンガル語と文学の歴史』に『シータラー・マンガラ』の写本について詳述されている。]

女神が怒りだしたらば、大好きな人参を上げましょう。

どうぞお受けとりください、女神さま。

女神が怒りだしたらば、砂糖キビを上げましょう。

怒りがすっかり治ったら、女神さまはゆっくり寝てください。

金と銀の耳飾りを女神さま、どうぞお受けとりくださいな。

[Madan Lāl Śarmā pp. 78, 79]

シータラー女神祭での女神シータラーの役割と姿

疱瘡を広めるシータラーは、人々にとって恐ろしい存在であり、また機嫌がよいときには疱瘡や死から人を護る女神でもある。女神のご機嫌をとるのは、妻・母の仕事である。そのさまは祈りの歌で、女神に人参や砂糖キビを上げて喜んでもらおうとしていることに、見てとれる。

C、ヴァト・サーヴィトリ祭＝妻が夫の無事と長命を願い、サーヴィトリ女神とその夫の創造神ブラフマーに、また貞女サーヴィトリとその夫のサティヤワーン王子にも祈る祭り

ヴァト・サーヴィトリ祭は、ヒンドゥー暦で第三月ジェートの新月の日（5月下旬）に、夫が存命する妻が行うのが原則の祭礼で、妻は夫の長寿を祈る。夫に先だたれた寡婦や婚前の娘もこの祭礼を行い、息子たちの長寿や将来の夫の長寿を祈ることができる。

ヴァト（vaṭ, サンスクリット語では vaṭa ヴァタ）は聖なる菩提樹を指す。幹の直径が1～2メートル、高さは20メートルになる。釈迦族の王子はボードガヤーのこの樹のもとで瞑想して悟りを開き、覚者（ブッダ＝仏陀）となった。サーヴィトリは王妃が敬う女神であり、また王と王妃に授かった娘の名でもある。

祭礼の進めかた

- ① 祭礼を執りおこなう女性は、早朝に沐浴して身を浄める。
- ② 竹の籠に砂を入れて、菩提樹の近くに置く。砂で創造神ブラフマーの像を造り、その隣りに配偶神サーヴィトリの像を造って置く。
- ③ 別の竹籠に入れた砂で、サティヤワーン王子とサーヴィトリ王女の像を造る。
- ④ 水の入った壺を持って、菩提樹のところに行く。
- ⑤ 女性は夫と息子たちの長寿・無病息災・来世の幸運を願って、「わたしはサーヴィトリさまを拝します」と唱えながら、菩提樹の根の周りに水を撒く。

幹には鬱金の朱をつけ、米や黒糖をお供物として上げる。そしてサーヴィトリ女神とブラフマー神、サーヴィトリ王女とサティヤワーン王子を拝む。

- ⑥ 一家の儀礼をしてくれたバラモン僧に、ご馳走する。
- ⑦ そのあとで、祭礼の由来譚を年長の女性から聴く。

[Tripāṭhī pp. 67, 68. Gaṅgrāṇe pp. 50, 51]

祭礼の由来譚、祭礼の歌

アシュヴァパティ王には子がいませんでしたが、妃とともにブラフマー神の妃サーヴィトリ女神に願って王女を授かりました。サーヴィトリ女神のおかげで得られた子なので、王女の名もサーヴィトリとしました。

王女が年頃になったのでアシュヴァパティ王は、ドゥユムトセーン王の一人息子サティヤワーン王子と自分の娘の縁談を結びました。ところが全知のナーラダ仙に訊ねると、「王子はあらゆる徳を備えているが、一年後には死ぬ運命にあるので、この縁談はないことにしたほうがよい」と言われます。しかし王女サーヴィトリは、「その方と添いとげます」と言って譲りません。

結婚して王子の死期が近づいたある日、二人は森に行きました。王子はそのとき頭に激痛を覚え、妃の膝にもたれて横になりました。そこに死の使者の閻魔がきて、王子の生命を抜いて立ちさりました。夫を救いたい一心の王女は、閻魔のあとについて行きます。

そのさまにほだされた閻魔は、王女に「二つの願いをなんでも叶える」と約束しました。そこでサーヴィトリ王女は、第一に夫の盲目の両親の目が見えるようにすること、第二に夫の父の王が失った国を回復させることを願い、叶えられました。それでも王女は閻魔について行きます。そこで閻魔は「もう一つだけ、どういう願いでも叶えよう」と約束しました。王女は「夫とのあいだに百人の息子をお授けください」と願いました。王子が倒れた菩提樹のところに王女が戻ると、王子が息を吹きかえしていました。

[Kane V-1 pp. 91-94 によると、この由来譚は『マハーバーラタの第 III 卷「森林の巻」にあるとのこと。念のために上村勝彦によるその邦訳を見ると第四卷 pp. 352-379 に詳しく述べられている。]

菩提樹を崇めるお祭りの日がきました。

綿の布を黄色く染めます。

菩提樹の周りを巡ります。

一周目には髪分け目に朱を付けます。

二周目には腕輪を着けます。

三周目には額に朱を、四周目には足の親指に銀の輪を。

五周目には菩提樹にお水や牛乳を注ぎます。

六周を終えたら婚家に戻り、夫の幸せを祈ります。

[Rohatgi p. 467]

ヴァト・サーヴィトリー祭での女神サーヴィトリーの役割と姿

この祭礼で注目すべきは、女神と貞女がサーヴィトリーという同じ名前を持っていることである。両親がサーヴィトリー女神に祈って授かった娘に、女神と同じ名をつけるのは自然かもしれない。

その娘が死神の閻魔から約束を引きだして、命を失った夫サティヤワーン王子を生きかえらせたという話は、女性を力づけるものとなろう。

「菩提樹を崇めるお祭りの日がきました」ではじまる歌は、その祭礼を行う女性がどういう風に行動するかを、「一周目には」以下で具体的に示している。歌や韻文はしばしば、無文字社会での記憶を正確に伝える手段となる。

D. ディーワリー祭＝燈火で道を示して富の女神ラクシュミーを自分の家に招く祭り

秋のカーディク月黒半月の新月の夜（10月上旬）に、人々は燈火を門から家まで並べ、富の女神ラクシュミーを招く。家の輪郭も燈火で示す。新月の夜にこうして、家への道と家が鮮明に浮かびあがる。ラクシュミー女神が道を誤ることなくわが家にお出でくださるだろうという気持ちが、そこに見られる。

祭礼の進めかた

- ① 家の壁をきれいにし、雨期にたまったゴミを片づけて、富の女神を迎える支度をする。
- ② 富の女神ラクシュミーと象頭人身のガネーシュ神の像を置き、水、米、果物、砂糖などのお供物をあげる。
- ③ はじめに男性が、そのあとで女性が神々を拝み、「富をもたらし、貧乏神を追いはらってください」と祈る。
- ④ それから燈火を家の四隅に置いて、ラクシュミー女神を招く。

⑤ この祭礼の由来譚を、年長の女性から聞く。

[Gaṅgrāṇe pp. 112, 113]

祭礼の由来譚，祭礼の歌

あるとき悪魔のバリが、ラクシュミーを含めた神々と女神らを牢獄に閉じこめました。ラクシュミー女神の夫で宇宙を守護するヴィシュヌ神が、小人の姿でバリを縛りつけ、牢獄から神々と女神らを解放しました。

そのあとラクシュミー女神は、解放された神々と女神らとともに乳海で休息すべくそこに行かれました。しかし富を願う人々は、女神に余所に行かれると困るので、女神の好きなお供物を捧げ、燈火で導いて自分の家に来ていただくのです。

[Kane V-1 pp. 194-201 によると、『ヘーマードリ・プラーナ』

「祭礼」I 巻に詳述]

片目の羊みたいな貧乏神は、さっさと消えなさい この家から。
おまえなんかに用はない、[富の女神] ラクシュミーがいればよい。
さっさと出ていきなさい、棒で打たれて痛い目に遭わないうちに。
ラクシュミー女神がおわすところに、おまえなんかいられない。
こんどこの家にきたならば、棒で打ってやっつけるわよ。
おまえなんか置いとけない、箒で叩きだしてやるからね。

[Rṣikumār Śarmā p. 126]

燈火祭での女神ラクシュミーの役割と姿

雨期に家も周りも汚れたのをきれにし、新月の闇夜に燈火で道とわが家をくっきりと浮かびあがらせて、富の女神を家に迎える。雨期から秋への移行の祭礼としてこれがさかんに祝われるのは、納得できる。

ディーワリーの由来譚で「女神に余所に行かれると困る」とし、歌で

は「貧乏神はこの家を去り、[富の女神] ラクシュミーにいて欲しい」と言っている。これはまさに、この祭りを祝う人たちの気持ちである。

E. ホーリー祭＝旧年の穢れをホーリカー女神に燃やしてもらい、人々が色水・色粉をかけあって春の到来を祝う祭り

ホーリー祭は、ヒンドゥー暦の最終月ファーグンの満月に行われる（3月中旬）。その支度はしかし、八日まえ（ファーグン月の白半月八日）にはじまる。ホーリー祭の翌日は、ヒンドゥー教徒にとって新年になる。ホーリカー女神が旧年の汚れを燃やすのがホーリー祭、翌日が新年となれば、ホーリー祭の日は日本の大晦日にあたる。

祭礼の進めかた

- ① 本祭の八日まえに、任命された人が町や村の辻に木の枝を埋める。
- ② 本祭までのあいだにみなが、草木やガラクタなど穢れたものを辻に置く。
- ③ 辻に木の枝を埋めた人は、本祭の日に沐浴・斎戒してホーリー祭をはじめる誓いを立てる。
- ④ 人々は木で小さな刀を作って男の子たちに渡し、男の子たちが思いっきり遊んであたりを賑やかにするよう仕向ける。
- ⑤ 人々はホーリカー女神の等身大の像を、木の枝を埋めた場所に立てる。
- ⑥ ホーリカー女神像に浄水を振りかけてから、女神を拝む。
- ⑦ 穢れた人（例えば不可触民や産後まもない女）の家の竈から、火をもってきて枯れ木に点ける。
- ⑧ 火が女神の像を包むようになったら女神を拝み、その周りをみなが並んで三周する。
- ⑨ 水を撒いて火を治め、残り火を各自の家に持ちかえて竈に入れる。

- ⑩ そのあとの夜とつぎの日の午前中に、人々は色水・色粉をかけあう。
- ⑪ つぎの日の午後は新年なので、みなは沐浴して身を浄め、新たな衣装に身を包んで、家祭僧・上司やふだんお世話になっている人に挨拶に行く。
- [Tripāṭhi pp. 304-308]

祭礼の由来譚、祭礼の歌

ホーリー祭の由来譚としていくつもの話が伝えられているが、以下にはそれらのうちで最も広く伝えられているものを、一話だけ記す。

羅刹の王ヒランニャカシプには、プラフラードという名の男子がいましたが、その子は正義の維持神ヴィシュヌに信を寄せていました。父のヒランニャカシプにヴィシュヌ神への信仰をやめるように言われても、プラフラードは父の言に従いません。

そこでヒランニャカシプは息子を殺すことにし、自分の妹ホーリカーに「プラフラードを抱いて火のなかに座れ」と命じました。ホーリカーは火中でも無傷でいられ、プラフラードが火で死ぬはずだったのです。しかしかれが火中でヴィシュヌ神を念想したので、かれは無傷でいられ、ホーリカーが焼け死にました。

[Kane V-1 pp. 237-241 によると、『ヘーマードリ・プラーナ』の「祭礼」II 卷に詳述。]

ホーリー祭です、賑やかに詠って色水・色粉をかけあいましょう。
肌白の娘さんが家を出ました、水鉄砲に色水をいっぱい入れて。
色水をかけました相手の男の人に、色粉もいっぱいかけましょう。
ヴェールを外して顔を見せなよ娘さん、怖がらないでこっちへおいで。

[Āśā Bahan & Lāḍo Bahan, p. 288 の 4]

ホーリー祭での女神ホーリカーの役割と姿

ホーリカーはこの祭りで、火中で焼け死ぬ。薪や旧年の檻樓などがともに焼かれることを勘案すると、ホーリカーは旧年の穢れと解されていることが明らかである。

この祭礼には、過ぎさる歳の穢れを焼きはらい、若芽・若葉が膨らんでくる春の到来を祝う意義があるようだ。

春は人々の心身を明るくする。また若い男女にとっては祝い歌にあるように、色水・色粉に託して心のうちを伝える機会でもある。類似の歌に、牛飼いの頭の子クリシュナと恋人ラーダーが色水・色粉をかけあうというものもある [Āśā Bāhan & Lāḍo Bāhan, p. 288 の 3, 5]。

〔Ⅲ〕 結び：五つの祭礼で祈願の対象と祈願する人

本稿では北インドのヒンドゥー教徒が祝う祭礼から、主に女神を崇める次の五つについて、それが行われる日、その祝いかた、由来譚と祝い歌を示したうえで、女神が果たす役割と女神の姿を考察してきた。

- A. 妻がシヴァ神の妃ガウルに夫の長寿を祈る**ガンガウル祭**。
- B. 家族が瘡瘡ほかの悪疫にかからないよう女性が**シータラー女神**に祈る**祭り**。
- C. 妻が夫の長寿を女神と貞女のサーヴィトリーに祈る**ヴァト・サーヴィトリー祭**。
- D. 燈火で道を示して富の女神ラクシュミーをみなで招く**ディーワリー祭**（燈火祭）。
- E. 旧年の穢れをホーリカー女神に燃やしてもらい、人々が色水・色粉をかけあって春の到来を祝う**ホーリー祭**。

以下ではおのおのの祭礼で、祈願するのがだれかを中心に見てゆく。

A. のガンガウル祭, B. のシータラー女神祭, C. のヴァト・サーヴィトリ祭の三つは、主に女神を崇めるものである。崇め祈願するのは、妻や母という女性である。

D. のディーワリー祭（燈火祭）と E. のホーリー祭の二つの祭礼は、主に女神を崇めるものであるが、崇める人は老若男女のだれでもよい。つまりこれらは、すべての人が祝う祭りである。

C. のヴァト・サーヴィトリ祭では、崇拜の対象に樹木という自然をも含むこと、サーヴィトリが女神の名であるとともにその女神に祈願して授かった王女の名でもあることに、注目しておきたい。自然を人々が身近に感じ、女神と貞女を重ねたいという女性の願いがここに見てとれる。これも含んだ五つの祭礼での女神は、人に姿を見せて人に語りかけている。つまり神官やバラモンなど仲介する専門家なしに、人々は神々と語りあえるのである。このことはここに取りあげなかったものも含めて、ヒンドゥー教徒の祭礼の多くについても言える。

神々はいつもは天界におわすのだが、祭礼のときには人々の勧請に応じて地上の人間界にお運びくださる。祭礼というのはこうして、神々と人々が触れあうことのできる特別な機会なのだ。

本稿ではそれぞれの祭礼のときに詠われる歌を、一つずつ訳して掲げた。民謡集や祭礼手引書などに載せられたそれらの歌は、現今のヒンドゥー教徒が祭礼をどのように祝っているか見せてくれる。祭礼の由来譚の多くが、4 世紀から 14 世紀ころまでのプラーナ（古譚）文献に依拠していることと対照的である。

本稿ではこうして、由来譚によって古い時代の思潮を知り、歌によって今日の民の心情を知ることができた。このことに、本稿の一つの意義があらう。

なおヒンドゥー教徒の祭礼には、それを祝う人の階層・身分が限られているものがある。本稿ではそのことについての言及・考察ができなかった。

そのことについては、フリード夫妻がデリー近郊の村で調査した報告があるので、関心のある方はそれを参照されたい。

文献（≡ 以降は邦語での概要で、編著者の姓を太字で示した）

Ācārya, Sunīti. *Braj Sāhitya evaṁ Lokgīt Paramprā*, Kānpur: Candralok Prakāśan, 2010. ≡ スニーティ・**アーチャールヤ**『ブラジュ文学と民謡の伝統』。

Bahan, Āśā & Lāḍo Bahan. *Bhāratiya Vrat-tyauhār aur Mahilā Saṅgīt* Haridvār: Raṇdhīr Prakāśan, N.D. ≡ **アーシャー・バハン**, **ラードー・バハン**『インドの斎戒と祭礼 および女性による歌』。

Bhansārī, Anuradhā. *Bārah Mahinoṁ ke Sarasvatī Vrat Tyauhār aur Kahāniyām*, Ajmer: Sarasvatī Prakāśan, N.D. ≡ **アヌラダー・バンサーリー**≡『十二ヶ月のサラスワティー斎戒と祭礼と関連の話』。

Freed, Stanley A. and Ruth S. Freed. *Hindu Festivals in a North Indian Village*, Seattle: University of Washington Press, 1998. ≡ **スタンレー A. フリード**, **ルス A. フリード**『北インドのある村におけるヒンドゥー教徒の祭礼』。

Gaṅgrāre, Prakāścandra. *Hinduṁ ke Vrat, Parv aur Tīj-tyauhār*, Dillī: Pustak Mahal, 2006. ≡ **プラカーシュチャンドラ・ガングラーレー**『ヒンドゥー教徒の斎戒と祭礼』。

上村勝彦『原典訳 マハーバーラタ 4』ちくま学芸文庫, 2002。

Kane, P. V. *History of Dharmaśāstra* V-1 (Vratas, Utsavas and Kāla etc.) 3rd ed. Pune: Bhandarkar Oriental Institute, 1994. ≡ **P. V. カネー**『ダルマシャストラの歴史』V巻の1（斎戒、祭礼と時期など）。

Rohatgī, Sarojnī. *Avadhī kā Lok Sāhitya*, Dillī: National Publishing House, 1971. ≡ **ローハトギー**『アヴァディー方言の民間文学』。

Sakata, Teiji. “Hindi Bārahmāsā Tradition: From Narpati Nālha to Present day Folk Songs and Popular Publications”, Williams, Tyler & Anshu Malhotra, John Stratton Hawley (eds.) *Text and Tradition in Early Modern North India*, Delhi: OUP, 2018. ≡ **坂田貞二**「ヒンディー語のバーラハ・マーサーの伝統：ナルパティ・ナールハから今日の民謡と俗受ける出版物まで」**T. ウイリアムズ**ほか編『北インド早期の現代文学におけるテキストと伝統』。

- Śarmā, Madan Lāl. *Rājasthāni Lok Gītōṃ kā Sāṃskṛitik Adhyayan*, Jodhpur: Rājasthāni Sāhitya Sansthān, 1987. ≡ マダン・ラール・シャルマー『ラージャスタン民謡の文化的な研究』。
- Śarmā, Rśikumār, *Bāraha Mahinōṃ ke Vrat aur Tyauhār*, Dillī: Nyū Standard Pablikeśan, 1999. ≡ リシクマール・シャルマー『十二ヶ月の斎戒と祭礼』。
- Sharma, Usha. *Festivals in Indian Society* Vol. I & Vol. II, New Delhi: Mittal Publication, 2008. ≡ ウシャー・シャルマー『インド社会における祭礼』 I, II 巻。
- Tripāṭhi, Rāmpratāp. *Hinduōṃ ke Vrat, Parv aur Tyauhār*, New ed., Illāhābād: Lokbhārati Prakāśan, 1978. ≡ ラームプラタープ・トゥリパーティー『ヒンドゥー教徒の斎戒と祭礼』。

（原稿受付 2017 年 11 月 13 日）